

今こそ伝えたい 音楽の力 vol.2

コロナ禍の下で音楽活動を続ける人々の思いを紹介した前号に大きな反響がありました。「早くみんなで楽しく演奏したい、歌いたい」「安心して劇場で演奏を聴きたい」「音楽は“必要不朽”です!」など、音楽を愛し、音楽から日々の喜びや活力を得ている人々の声が数多く届けられました。そこで引き続き「今こそ伝えたい音楽の力」を特集します。第2弾の今号では、兵庫県立芸術文化センターで芸術監督を務める指揮者・佐渡裕さんに、コロナ下での取り組みや思いを語ってもらいました。

佐渡 裕さん

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝。1995年第1回レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクール優勝。これまでパリ管弦楽団、ベルリンドイツ交響楽団、ケルンWDR交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団、北ドイツ放送交響楽団(現・NDRエルブフィルハーモニー管弦楽団)など、欧州の一流オーケストラで多数客演を重ねている。2015年から、オーストリアを代表し110年以上の歴史を持つトーン・シキュンストラ管弦楽団音楽監督に就任し、欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラの首席指揮者を務める。今年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団ミュージック・アドバイザーを務めており、来年4月には同楽団音楽監督に就任予定。



復興のシンボルから 心のビタミンを発信し続ける

私が兵庫県立芸術文化センター(以下、芸文)の芸術監督に就任したのは2002年です。阪神・淡路大震災から7年がたち、人々の努力で住まいや街並み、交通機関などの整備・復旧は進んでいましたが、被災した方々の心に残る爪痕はまだ深く、日々を生きるのに精いっぱいだという人がたくさんいました。音楽を楽しむ余裕がないという人々に対して、指揮者として自分にできることは何だろうと葛藤するなか、「芸術文化活動により、県民の心を元気に、生活に潤いを、人生を豊かにすることをめざす」という芸文の設立趣旨を聞きました。「ここをみんなの心の広場にしたい」と胸が震える思いがしました。

阪神・淡路大震災から10年となる節目の2005年の開館に向け、地域の皆さんの理解を得るため、周辺の学校や商店街に足を運ぶなかで、「ホールを造るお金があるなら、うちの店のロウンをどうにかしてほしい」と言われたこともあります。

衣食住も安定しない緊急事態において、音楽や芸術に対する不要不急論は当時もありました。しかし、おなが満たされるだけで私たちは生きていけるでしょうか。大変なときだからこそ、音楽の楽しさやおもしろさ、そして音楽を通して人と人がつながっていることを発信していかなければならぬと強く思いました。

音楽は心が健康であるためのビタミンのようなものです。震災前よりも街が豊かになり、人々の交流が活発になっていくために、心のビタミンがとても大切なのだと思っています。毎年、スーパーキッズ・オーケストラとともに東日本大震災や熊本地震の被災地を訪れ、復興祈念演奏を続けていますが、活動を通してその思いはさらに強くなりました。現在のコロナ下においても、発信し続けなければならないと思っています。

兵庫県立芸術文化センター

阪神・淡路大震災からの「心の復興・文化の復興」のシンボルとして、2005年10月に開館。「コンサートホール」と、オペラ、バレエ公演に適した「オペラハウス」の両方の機能をあわせ持つ4層バルコニー形式の「KOBELCO大ホール」、また、演劇を中心にミュージカルや古典芸能まで幅広いジャンルの公演が可能な2層バルコニー形式の「阪急 中ホール」、リサイタルや室内楽、ジャズなどの小編成の公演に適した舞台客席一体型アリーナ形式の「神戸女学院小ホール」の3つのホールを備え、芸術文化の発信拠点として、さまざまな舞台芸術を展開しています。



©飯島隆

住所:兵庫県西宮市高松町2-22
電話:0798-68-0255(芸術文化センターチケットオフィス)
※10:00~17:00 月曜休(祝日の場合は翌日)
URL:<https://www1.gcenter-hyogo.jp/>



プロデュースオペラ2018「魔弾の射手」前夜祭©飯島隆



佐用町復興支援コンサート(2009年)

世界的な逆境のなか 人との「縁」をつなぐ音楽

私たちはコロナ禍という世界的な逆境のただなかにいます。1回目の緊急事態宣言が発令された2020年の春は、3月からの約4カ月間、ほとんどの公演が中止になり、劇場も臨時休館を余儀なくされました。「こんな時だからこそみんなに笑顔届けたい」「そのために今、何ができるのか」。私たちはまたしてもこの問題と向き合うことになりました。

学校が休校になったり、在宅勤務になったりして、人と会ったり話したりする機会が減り、孤独を感じている人々と、なんとか音楽でつながることができないかという思いで立ち上げたのが「HPACすみれの花咲く頃プロジェクト」です。宝塚歌劇団を象徴する歌として兵庫ではおなじみの曲「すみれの花咲く頃」を、兵庫芸術文化センター管弦楽団（PACオーケストラ）のメンバーが自宅で演奏した

スーパーキッズ・オーケストラ

芸文のソフト先行事業として2003年から始動。佐渡裕芸術監督が率いる、小学生から高校生までのジュニア演奏家による弦楽器オーケストラです。厳しい選考を通過した未来の演奏家たちは、合同練習や夏合宿、本番公演を通じて演奏技術を磨くとともに、音楽ができる幸せを共有しています。毎年、佐渡裕芸術監督とともに東日本大震災や熊本地震の被災地を訪問し、復興祈念演奏なども行っています。



こころのビタミンプロジェクトin東北

動画を公開。視聴者の皆さんがその演奏に合わせて歌ったり、演奏したりした動画を投稿してもらい、まるで両者が共演しているかのように編集したものをYouTubeで公開するという試みでした。多くの方に参加していただき、最終的にフィナーレを含め33本の動画を公開。のべ50万人以上の方々に見てもらえました。



約400組が参加し、共演を果たしたプロジェクト動画はこちら



私たちが劇場にオペラやクラシックのコンサートを見に足を運ぶきっかけは「彼女がオペラ好きで」「両親につれられて」など、「縁」による部分が非常に大きいと思っています。この動画を多くの方に見てもらえ

兵庫芸術文化センター管弦楽団

兵庫芸術文化センター管弦楽団（Hyogo Performing Arts Center Orchestra=通称PACオーケストラ）は芸文のオープンと同時に創設された専属オーケストラです。世界一流の客演指揮者やソリストを招いた定期演奏会をはじめ、プロデュースオペラへの出演、全国各地からの依頼公演、兵庫県内の公立中学1年生を対象とした「わくわくオーケストラ教室」、街の中で人々と交流しながら演奏する出張公演やイベントなど、多彩な活動を行っています。

日本国内をはじめ、米国や欧州、アジアなどからオーディションで若手プレイヤーを選抜し、最長3年の在籍期間中に優秀なオーケストラ・プレイヤーを育成するというアカデミーとしての顔もあわせ持ちます。



定期演奏会の様子

©飯島隆



たことで、普段、音楽に興味のない人にも、劇場に足を運んでみたいと思ってもらうための「縁」づくりができたのではないかと思います。

プロジェクトと並行して、劇場では営業再開に向け、さまざまなスタッフや、医学・工学分野の専門家、合唱・声楽の専門家の方々の協力のもと、感染防止策を模索し続けました。劇場設計者・空調設計者の情報をもとに、感染症の専門家とともにスモークを



「どんな時も歌、歌、歌!〜佐渡裕のオペラで会いましょう」(2020年7月) ©飯島隆



休館中に掲げられた横断幕(2020年)

たいて舞台上の空気の流れを検証する実験を行い、ソリストが立つ位置とオーケストラの間にエアーカーテンを設置したり、音響反射板を従来よりも約8・6メートル後方に設置したりして、舞台上のスペースを確保。出演者の密を避けるといった対策をとりました。皆さんも夏に使っているハンディー扇風機、あれを首元につけることで上向きに気流を発生させ、エアロゾル対策にするとという考え方で、合唱団が装着して歌ったりもしました。お客さまと出演者、両方の不安を払拭し、安心して公演ができるよう、世界一の感染症対策をめざしました。このコロナ禍で、個人的には改めて「音楽が好きだ」ということを実感し

ました。埋まっていたスケジュールが、中止や延期でどんどん白紙になり、この機会に新しい楽曲を勉強しようという譜面を机に積み上げましたが、お客さんやオーケストラとの再会が全く見えない状況の中で、正直、譜面に没頭することはできませんでした。あんなにも指揮をしたい、みんな音楽を奏でたいと思ったのは初めてでしたね。この衝動は今後の音楽活動の原動力になってくれるんじゃないかと思っています。

今できることを考えて 動くことが、未来を変える

プロの世界のみならず、コロナ禍で満足のいく音楽の授業や活動ができない子どもたちや指導者の先生方は、本当に悔しい思いをしていることと思います。もちろん音楽に携わる人だけでなく、スポーツや学校行事など、一生に一度、今しかできない体験の機会を奪われ、悲しみや理不尽さを感じる気持ちは十分にわかります。でも、この経験をただ不運だと嘆いて終わるのか、そのなかでも「なんとか自分たちの活動

の軌跡を残したい」「自分たちの経験や技術を後輩に引き継ぎたい」とあぐのか。その差は必ず、皆さんの今後の人生を左右すると思えます。

音楽に携わる者として合唱やリコーダーの練習ができない音楽の授業の助けになればと、動画教材の制作を進めています。PACオーケストラが過去に演奏したベルリオの「幻想交響曲」やドヴォルザークの「交響曲第9番」などを題材に、楽曲の詳しい解説や楽器の紹介を1本20〜30分の動画にまとめました。芸文の音響、照明、舞台スタッフの皆さんと一緒に制作したDVDを兵庫県内の小中学校などへ配布する予定です。「幻想交響曲」を題材にした動画は現在、「わくわくOnlineオーケストラ教室」としてPACオーケストラのYouTubeで公開していますので、授業や自宅学習の教材として活用してもらおうのももちろん、音楽が好きになつてもぜひ見て楽しんでいただければと思います。これからも私たちはいつどんな時でも音楽の喜びを発信していきたい。ぜひ芸文へ足をお運びください。



オペラ・クラシックコンサートを楽しむ方

オペラやクラシックと聞くと「なんとなく敷居が高そう」「難しそう」という方も多いのではないのでしょうか。しかし、音楽と歌、お芝居という構成要素で考えると、オペラはミュージカルや演劇、歌舞伎などと大きな差はありません。「チケットが高そう」という声もありますが、席によっては一般的なアーティストのコンサートより安いことも。今回の特集で「劇場に行ってみよう」と思った方のために、佐渡芸術監督に芸文の魅力やオペラの楽しみ方を聞きました。

芸文がオープンした2005年から、毎年数多くのクラシックコンサートやプロデュースオペラを実施してきましたが、最初はほとんどのお客さんが「初心者だったと思います。それでも当初からロングラン公演ができたのは、関西には「宝塚」の文化があつて、もともと劇場に足を運んだり、音楽や舞台を楽しんだりすることに對する親和性が高かったからかもしれませんね。

まず芸文は交通アクセスがすごくいいので、来場してもらいやすいというのがポイント。阪急の西宮北口駅直結なので、雨でも濡れずに来場できます。そして初めての方にも気軽に来てほしいという思いから、チケットの金額もかなり抑えています。

プロデュースオペラならA席が1万2000円、E席なら3000円から鑑賞できます。「安い席は見にくいのでは？」という方もご安心を。芸文のホールは舞台と客席の距離感を感じさせない設計と豊かな残響で、どの席からでも臨場感あふれるパフォーマンスを楽しめます。特にオペラは役者が舞台上を動き回りますし、どの役に注目して見るか、どのシーンがお気に入りかによっても、ベストな席は違ってくるので、必ずしも高額な席が良席というわけでもないんです。

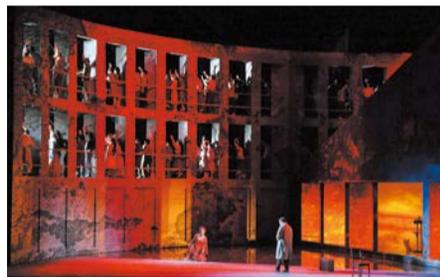
「オペラは急に高い声で歌い出したりすることに違和感がある」という声も聞きます。実際、私も指揮をしながら「なんでこの人はこんな大



プロデュースオペラ2017「フィガロの結婚」©飯島隆



プロデュースオペラ2016「夏の夜の夢」©飯島隆



プロデュースオペラ2009「カルメン」©飯島隆

きな声で「アイラブユー」って叫んでるんだろーう」なんて思うこともありますが（笑）。でも、演者の生の声が数百・数千の観客に直接ガツンと響いてくることこそ、オペラの魅力なんじゃないかと思えます。ほかにも、シーンの温度や湿度、登場人物の感情まで感じ取れるような音楽、共感しやすい恋愛悲喜劇のストーリー、すばらしい衣装や舞台装置など、色々なお

もしろいものが詰まった総合芸術、それがオペラです。

「オペラはたくさん人が死ぬからイヤだわ」というお客さんいらっしゃいますね。「メリー・ウイドウ」というラブ・コメディのオペレッタが楽しくて、翌年「カルメン」を見に来たら全然違ったと（笑）。確かにオペラは主人公やその恋人が死んでしまうストーリーが多いんですが、そのシーンに寄り添う音楽の美しさや繊細な演技をぜひ楽しんでいただきたいですね。

また、オペラはダブルキャストで上演することが多いので、チームごとの雰囲気の違いも見どころです。ぜひ海外組と日本人組、ベテラン組と若手組など、それぞれのチームの特徴やチームワークの良さ、アンサンブルのおもしろさなどを見比べてみてください。

オペラ鑑賞の初心者におすすめ 佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ

大人から子どもまでより多くの方々に劇場体験のすばらしさを知ってもらうため、初心者の方にも親しみやすい演目のオペラ公演を毎年夏に実施しています。入場料は低価格に抑えながら、国内外第一級のクリエイティブスタッフと出演陣による世界に通じるハイクオリティのオペラを制作。一つの作品を8日にわたって上演する、全国的にも珍しいロングラン公演で、これまでに「ヘンゼルとグレーテル」「蝶々夫人」など16作品を制作・上演。のべ約29万人が観賞しています。

プロデュースオペラの開催前にはオペラ歌手によるハイライトコンサートや、専門家・演奏家らによるレクチャー・トーク、公開リハーサルやワークショップなども実施し、新たなオペラファンの開拓や地域に根付いた舞台芸術の発展をめざしています。



プロデュースオペラ2021「メリー・ウイドウ」©飯島隆



プロデュースオペラ ワークショップの様子(2017年)©飯島隆

佐渡裕芸術監督プロデュースオペラこれまでの公演

| | | | |
|-------|------------|-------|--------------------|
| 2005年 | ヘンゼルとグレーテル | 2014年 | コジ・ファン・トゥッテ |
| 2006年 | 蝶々夫人 | 2015年 | 椿姫 |
| 2007年 | 魔笛 | 2016年 | 夏の夜の夢 |
| 2008年 | メリー・ウイドウ | 2017年 | フィガロの結婚 |
| 2009年 | カルメン | 2018年 | 魔弾の射手 |
| 2010年 | キャンディード | 2019年 | ミュージカル オン・ザ・タウン |
| 2011年 | こうもり | 2020年 | ラ・ボエーム(中止) |
| 2012年 | トスカ | 2021年 | メリー・ウイドウ(改訂新制作) |
| 2013年 | セビリヤの理髪師 | 2022年 | ラ・ボエーム(7月15日～公演予定) |

公演情報

佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2022 歌劇「ラ・ボエーム」

全4幕／イタリア語上演・日本語字幕付き／新制作
指揮：佐渡裕
演出：ダンテ・フェレッティ
2022年7月15日(金)～24日(日)全8公演
兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール

関連企画

参加費無料!

7/12(火)・13(水)
「ラ・ボエーム」公開リハーサル

最終リハーサル(ゲネプロ)に聴衆役としてクリエーションに参加いただける貴重な機会です。

7/14(木)
オペラワークショップ「ラ・ボエーム」の創作アトリエ

初日前日、オペラの創作に関わった海外のクリエイティブ・スタッフや佐渡裕芸術監督が制作秘話を語ります。オペラが創り上げられる裏話やリアルな本音トーク、創作への熱い思いなど、舞台を見るだけでは決して知ることのできない濃い内容のワークショップです。

公演チケットの購入や、関連イベントへの申し込み方法など、詳しくはホームページをご覧ください。



佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2022 歌劇「ラ・ボエーム」の見どころをご紹介

今年のプロデュースオペラの演目は「ラ・ボエーム」。2020年に中止・延期を余儀なくされた本作が、奇跡的にその時と同じキャスト・スタッフで上演されます。ここでは「ラ・ボエーム」の見どころと、2月に実施された記者会見の様子をご紹介します。



見どころ① 一瞬で物語の世界・パリへ誘う プッチーニの音楽

「ラ・ボエーム」はアンリ・ミュルジエールの小説をもとに、プッチーニが作曲したイタリア・オペラ。19世紀前半のパリを舞台に、お針子のミミと詩人のロドルフォの出会いと別れの物語をみずみずしい音楽で紡ぎます。作中には「冷たい手を」「私の名前はミミ」「私が街を歩けば」「など、珠玉のアリア（独唱曲）が目白押し。ソリストの歌の力はもちろ

ん、しんしんと降り積もる雪の冷たさや、登場人物たちの心情、情景までも表すような音楽で、観客を瞬時に物語の世界へ誘ってくれます。

見どころ②

若き芸術家たちを等身大で演じるフレッシュユな若手キャストが集結

「ラ・ボエーム」の登場人物は、貧しくも夢を糧に生きる若き芸術家IIボヘミアンたち。若さゆえのエネルギーとはかなさを鮮やかに表現しうる旬のキャストがそろいました。海外からはミラノ・スカラ座アカデミー出身の若手歌手をオーディションで選抜。デビューしたばかりの逸材など、明日のスターの歌声を聴く貴重な機会です。もう一組には、日本でミミ、ロドルフォ役といえは真っ先に名前が挙がる、決定版の配役が実現。いずれ劣らぬ魅力的なキャスト陣にも注目です。



©Yoshinobu Fukaya



ミミ役：フランチェスカ・マンツォ / 砂川涼子
ロドルフォ役：リカルド・デッラ・シュッカ / 笛田博昭

見どころ③ アカデミー賞を3度受賞した 世界的美術家が演出

演出には主に映画美術で世界的名声を博すダニエ・フェレッティを起用。イタリアの映画監督、フランコ・ゼフィレリやフェデリコ・フェリーニのもとでキャリアを積み、ハリウッドでマーティン・スコセッシ監督の「アビエイター」、ティム・バートン監督の「スウィーニー・トッド」などの美術を担当。アカデミー賞の美術賞を3度受賞する世界的なデザイナーです。オペラではミラノ・スカラ座でリリアーナ・カヴァーニ演出「椿姫」の装置デザインを担当し、高評価を博しています。

今回、芸文での「ラ・ボエーム」上演にあたり、主人公たち若き芸術家のシエアハウスを、原作の屋根裏部屋から印象的な船の上に変更。こだわりの装置や美しく洗練された衣装の数々は、現在ローマで製作が進められています。



ダニエ・フェレッティの衣装デザイン画



ローマの工房での製作の様子

記者会見レポート

対談「ラ・ボエーム」を語る 佐渡裕芸術監督 × 玉木正之氏（スポーツ・文化評論家）

2月下旬に芸文KOBELCO大ホールの舞台上で記者会見が開催されました。佐渡芸術監督とスポーツ・文化評論家の玉木正之さんが対談形式で語り合った「ラ・ボエーム」の魅力について、その一部をご紹介します。



ぜひ3幕に注目してください（佐渡）

「ラ・ボエーム」の1幕は、青春まったただなかで恋に落ちていくミミとロドルフォ、2幕はクリスマスでにぎやかなカルチエラタンの街並みが描かれます。どちらもすばらしいのですが、注目は何といっても3幕。病気のミミの様子や、ロドルフォがミミに別れ話を切り出すシーンが描かれます。そこに流れるプッチーニの音楽が秀逸です。ミミの病気がどれほど深刻か、ロドルフォの「別れよう」という言葉が本心ではないということ、ミミの手を握るロドルフォの手のぬくもり……。そういったことが音楽でわかるんです。同じシーンのセリフだけを聞いても、おそらくここまでドラマチックにはならないでしょう。音楽によって、脚本の何十倍もの感情が伝わってくるんです。



ミミの描かれ方がどう変わるかも興味深い（玉木）

ミミがどんな女性として描かれるかにも注目しています。昔は純情で、せっかく愛する男性と出会えたのに不治の病で死んでいく薄幸の女性という描かれ方が定番でしたが、最近少し変わってきていますよね。1幕でろうそくの火をもらいに行くロドルフォとの出会いのシーンも、実は自分で火を吹き消していたりとか。自分から恋の駆け引きを仕掛けていくような積極的な女性として描かれることも増えてきました。音楽もセリフも全く変わらないのに、時代に合わせて物語の本質や人物像が変わっていくというのは、オペラのおもしろさの一つでもありますね。さて、今回はどんなミミが見られるのか……。楽しみにしています。

